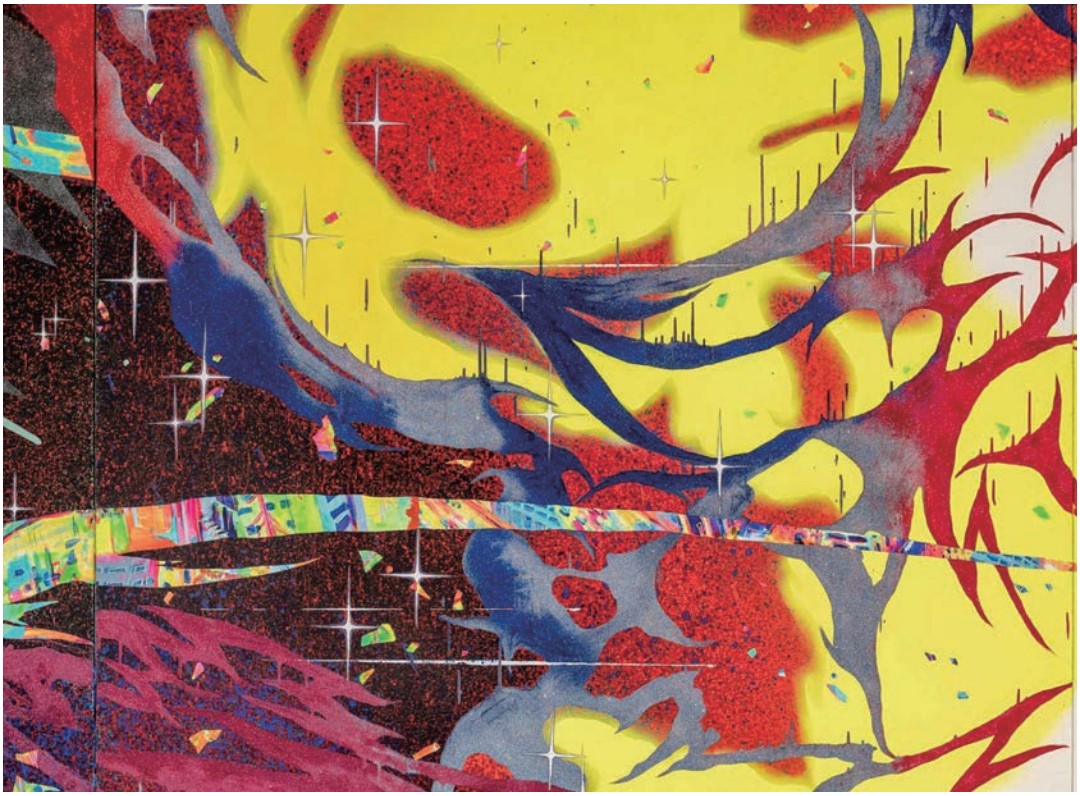
Ayuchi（あゆち）

[No.85/2020.1]



「Conflagration」　藤原 葵さん作（写真は部分）

公益財団法人　愛銀教育文化財団

南吉文学のふるさとへ。

『ごん狐』の風景を残す地

日本の童話作家として宮沢賢治と並び称される新美南吉。皆さんも小学校の教科書で代表作の『ごん狐』や『手袋を買いに』と出会っているのではないだろうか。

だが、それっきりという人も多いに違いない。そこで、今回は南吉のふるさとである半田市の岩滑地区に、新美南吉記念館を訪ねてみた。

まず驚いたのは、記念館の形状だ。地上一階、地下二階。屋根に芝生が施され、周囲の風景とすっかり同化している。思わず「入口はどこだ？」と探してしまった（入口はスロープ下の地下にある）。

「当館は平成六年に開館して、二十五年が過ぎました。南側にある〝童話の森〟は中山と呼ばれていたところで、『ごん狐』の舞台となったところです。近くを流れる矢勝川を挟んで権現山もあります。まさに『ごん狐』のお話の世界ということで、そういう中では目立つ建物より、この風景を生かせる、周りに溶け込むような形が選ばれました」

と、学芸員の小栗真子さん。

厳密に言えば権現山は隣り町の知多郡阿久比町になるのだが、童話の世界にそんな線引きはいらない。ましてや、狐にとっては。『ごん狐』の〝ごん〟は権現山の〝権〟ではないかとも言われている。そんな目で周囲を眺めると、何だか南吉の世界が見えてくるような気がしてきた。

新美南吉記念館 学芸員
小栗真子さん

作品の中に生きる南吉

記念館の中は南吉に関するいろいろな展示物が時系列順に並んでいる。それを案内するように、床には狐の足跡が点々と続く。そんなちょっとした工夫が、子供達を喜ばせ、大人を童心に返らせる。

そう言えば、館内には子狐が七匹、どこかに隠れているそうな。来館されたらぜひ見つけてほしい。

新美南吉記念館外観
（11月に撮影）

さて、新美南吉である。彼は大正二年（一九一三）に生まれ、昭和一八年（一九四三）に二十九歳の若さで亡くなった。

幼少の頃に実母を亡くし、養子に出されるも寂しさに耐えかねて戻り、中学の成績は良いのに体が虚弱で師範学校への門戸を閉ざされ、執筆意欲は旺盛なのに結核に罹り若くして逝ってしまった…と聞くと、不幸のどん底の人のように思えるが、それは南吉の一面でしかない。

周りの人々は南吉の思いをできるだけかなえようとしてくれたし、南吉自身も、中学時代から創作に意欲を燃やし、代用教員を経て東京外国語学校（現在の東京外国語大学）に進むと、北原白秋に師事して童謡や童話の創作に一層励んだ。

恋も三度した。女学校の教員として、生徒達との詩作にも力を注いだ。哀しみや迷いを抱えつつも、人生を大好きな文学に捧げていったのだ。

短命だったにも関わらず、彼が遺した作品は童話、小説、童謡、詩、戯曲、俳句、短歌など多岐にわたり、その数は一五〇〇点を超えるというから驚く。

ちなみに、『ごん狐』の草稿となる『権狐』を書いたのは十八歳、『手袋を買いに』は二十歳という若さだった。

代用教員時代

生誕100年（2013年）を記念して、南吉作品をモチーフに制作されたステンドグラス。地元の小学生や記念館のスタッフも制作に参加した。

教科書に載った『ごん狐』

ごん狐

イタズラ好きの狐のごんは、村人の兵十が川で獲ったウナギを盗んでしまう。兵十の母がそのウナギを食べることなく亡くなったことを知ったごんは、反省し、自分と同じく一人ぼっちになった兵十に魚や栗、松茸などを届けるが、兵十はそれがごんからの贈り物とは気づかない。ある日、栗を届けに兵十の家にこっそり忍び込んだごんを見つけて、兵十は火縄銃でごんを撃ってしまう…。

『ごん狐』が初めて教科書に載ったのは昭和三二年（一九五六）のこと。白秋門下の兄弟子である巽聖歌（童謡『たき火』の作詞者）の尽力による。昭和五五年（一九八〇）には全ての教科書会社に採用され、以降は小学四年生で必ず習うことになる。

「今、日本全国で六千万人以上が南吉の作品を読んだことになり、全人口の半分に相当するそうです」（小栗さん）

半田市では、市内十三校の小学四年生を対象に出前授業を行っている。二時間の授業で、前半は南吉の生涯を学び、後半は『ごん狐』に出てくる〝はりきり網〟や火縄銃を実際に手に取ったりしながら、さらに深く学習していくのだ。

中でも地元の岩滑小学校（南吉が代用教員をした学校）では南吉学習に力を入

はりきり網

秋になると、矢勝川の堤に『ごん狐』にも登場する彼岸花が咲き乱れる。
その数、なんと300万本!

れ、最終的には下級生や他校生に解説できるほどになるという。故郷の先輩として、南吉を誇りに思う気持ちは脈々と受け継がれていくようだ。

『ごん狐』は改作されていた？

ところで、教科書に載っている『ごん狐』が、南吉の草稿『権狐』とかなり違っていることをご存じだろうか。

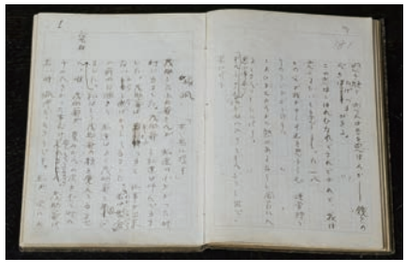
教科書に載ったものと言うより、南吉が十八歳の時に発表された雑誌『赤い鳥』に掲載されたものが、実は手を入れられていたのだ。推敲したのは『赤い鳥』の主宰である鈴木三重吉だと言われている。

考えてみれば、『権狐』を書いた南吉はまだ十八歳。東京に出る前の田舎暮らしの中で生まれた作品だ。（もちろん、だからこそ生まれた名作でもある！）

「手が入ったことで洗練され、どこの子が読んでも分かるように方言を標準語に直されました。この三重吉の推敲は南吉自身も受け入れていたようで、晩年に童話集が出る話があった時にも『赤い鳥』に載ったほうを入れています」（小栗さん）

『ごん狐』が掲載された「赤い鳥」（昭和7年1月号）

推敲の中で最も注目されているのが、最後に銃で撃たれたごんの様子を「うれしくなりました」から「うなずきました」に変えた点だ。ごんの思いが兵十にやっと伝わって「うれしくなりました」というのもわかる。しかし、何を思ったのかを子供達に考えさせることになり、教科書にふさわしい作品になったのではないか、とも言われている。



草稿『権狐』が書かれた通称スバルタノート。

世界に広まる南吉作品

いずれにしても、南吉の童話は〝考えさせる〟結末が多い。

『手袋を買いに』も、一見ほほえましい童話のようでありながら、お母さん狐が最後に「人間は本当にいいものかしら」と問う。答えはどこにも書いていない。

それでも、子狐のプチ冒険譚である『手袋を買いに』は海外でも人気があり、英語、フランス語、ドイツ語、中国語、韓国語、ロシア語などに翻訳され、『ごん狐』より世界に広まっているのだという。ストーリーとしては単純で、日本文化を知らなくてもわかりやすいからかもしれない。

館内にある『手袋を買いに』のワンシーン。扉の隙間に「ほんとうに人間はいいものかしら」という文字が見える。

手袋を買いに

雪の日の狐の親子。子狐に手袋を買いたいが、人間を怖いものと思っている母狐は、子狐の片手を人間の手に化けさせて町に手袋を買いに行かせる。夜、店の扉を少しだけ開けて子狐は「この手に合う手袋をください」と言うが、出した手は狐の手のほうだった。それでもお金が本物であることを確かめた店の人は、子狐に手袋を売ってくれた。子狐は「人間はちっとも怖くない」と母狐に告げる。

オリジナル原稿の復活

『ごん狐』が「赤い鳥」に掲載された際に変えられたのとは別に、終戦後、南吉のいくつかの原稿は改作された。それは南吉が作品を書いたのが戦前であったため、GHQ（連合国軍最高司令官総司令部）の手前、戦争に関わる表現をそのままでは出せず、巽聖歌が書き換えたのだ。書き換えてでも南吉の作品を世に出したかったのだろう。昭和40年（1965）、新美南吉全集（牧書店）は出版された。

それをオリジナルの原稿に戻す活動があり、昭和55年（1980）に「校定新美南吉全集」（大日本図書）が出版されて、南吉の作品研究が一層進んだ。

南吉作品をイメージした館内。
手前は『おじいさんのランプ』のワンシーン。

大人になってからも読み返したい

南吉の童話や少年小説のどこに惹かれるのだろうか、と考えてみる。

豊かな自然と人々の生活風景だろうか。民話的な語りだろうか。登場する動物や子供達の素朴な可愛らしさだろうか。

巧みな心理描写だろうか。どこか漂う悲哀のエッセンスだろうか。

それとも、美しい生き方を求めて模索する南吉自身の姿が透けて見えるからだろうか。

子供の頃に読んだ作品を、改めて読み返してみると、懐かしさとともに、じわりと胸に迫るものがある。晩年に書かれた『最後の胡弓弾き』や『おじいさんのランプ』などは、市井の人々の生き様を描いたもので、いろいろな経験を超えてきた大人だからこそ共感するものがあるのだろう。

そこまで南吉が計算していたかどうかは分からない。作品は「さあ、どう思う？」と尋ねているようだ。

答えは読者一人ひとりの心の中にある。

●　●　●

最後に衝撃的な事実（?!）を一つ。『ごん狐』や『手袋を買いに』が有名なため、新美南吉と言えば〝狐〟というイメージが強いが、南吉が最も多く登場させている動物は〝牛〟だった！（小栗さん情報）　興味のある方は全作品をチェックしてみるのも面白いかも?!

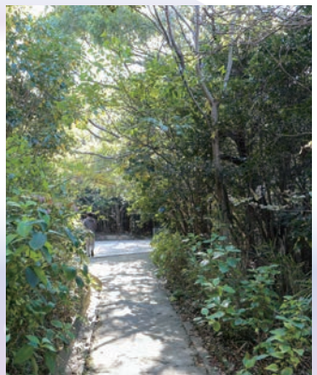
幼年童話から少年小説へ～主な作品と制作年（童話と少年小説に限る）

昭和3年	15歳	半田中学校時代	「赤蜻蛉」「銭坊」
昭和4年	16歳		「張紅倫」「巨男の話」
昭和6年	18歳	代用教員時代	草稿「権狐」
昭和7年	19歳	東京外国語学校（現在の東京外国語大学）時代	※この年の「赤い鳥」1月号に「ごん狐」掲載
昭和8年	20歳		「手袋を買いに」
昭和9年	21歳		「名無指物語」
昭和10年	22歳		「赤いろうそく」「でんでんむしのかなしみ」など幼年童話約30編
昭和11年	23歳	卒業・帰郷	「決闘」
昭和12年	24歳	代用教員・会社員時代	「空気ポンプ」
昭和13年	25歳	安城高等女学校（現在の安城高校）教諭時代	※仕事が忙しくて執筆のゆとりが無かったと思われる
昭和14年	26歳		「最後の胡弓弾き」「久助君の話」
昭和15年	27歳		※小説等を書く
昭和16年	28歳		「良寛物語　手毬と鉢の子」「嘘」
昭和17年	29歳		「おじいさんのランプ」「花のき村と盗人たち」「牛をつないだ椿の木」
昭和18年	29歳7か月		「狐」「疣」　※3月22日、喉頭結核のため永眠

参照：新美南吉記念館HP

新美南吉記念館
半田市岩滑西町1-10-1
TEL 0569-26-4888
http://www.nankichi.gr.jp
開館時間　9:30～17:30
休館日　月曜日・第2火曜日（祝日の場合は翌平日）、年末年始
観覧料　220円（中学生以下無料）

毎年、3月22日の貝殻忌（南吉の命日）、7月30日の生誕祭を中心に、各種イベントを開催。隔月で情報誌も発行。



記念館の南側「童話の森」には遊歩道があり、『ごん狐』の物語世界を味わえる?!

■取材・撮影協力、写真提供／新美南吉記念館、半田市企画部企画課

※この記事内では、童話のタイトル表記を、草稿は『権狐』、それ以外は『ごん狐』、また『手袋を買いに』で統一しています。

壁を意識しないで、もうちょっと大きな目で見ればいい。

尾崎　亨（愛知県教育・スポーツ振興財団　理事長　愛銀教育文化財団　評議員）

■尾崎　亨 プロフィール

昭和33年、幡豆郡吉良町（現在は西尾市）生まれ。神戸大学経済学部卒。昭和55年、愛知県庁に入庁。主に福祉畑を歩き、老人福祉、ハンセン病、廃棄物処分、戦没者追悼、子育て支援など多岐にわたる業務を推進。平成23年より健康福祉部地域福祉課長、同部子育て支援課長、同部健康福祉総務課長、同部保健医療局次長を歴任し、平成28年より愛知県心身障害者コロニー副総長兼運用部長を務め、30年3月に県職員を定年退職。同年6月、現職に就任。直後に人生初の入院生活を約3か月間送り、その間の退屈しのぎに始めたパズルを解くことが今も趣味の一つになっている。

愛銀教育文化財団の贈呈式で高校生の部活動が話題になり、自分もハンドボールを中・高・大とやっていたことを思い出しました。と言っても、何となく続けていたという程度ですが（笑）。大学は神戸大学で、リーグ戦でいろんな土地に行けたことが面白かったですね。関西のリーグは範囲が広くて、和歌山や京都にも行きました。

大学では自分の出身地を紹介する機会があったのですが、私の出身地である吉良町は自慢できるものがあまりない。そこで「吉良上野介の吉良だ」と言ったら一発で理解されました。何しろ神戸は赤穂に近いですからね（笑）。

父の勧めもあって、卒業後は公務員となり、愛知県庁に務めました。最初に入ったのが老人福祉課で、以来、公務員生活のほとんどで福祉関係の仕事をしていました。だからでしょうか、〝教育〟というより、生涯学習にも使う〝学習〟という言葉のほうが身近だったのですが、一昨年から今の愛知県教育・スポーツ振興財団に勤め、愛銀教育文化財団にも関わるようになって、〝教育〟の役割を実感しているところです。

退職の前は愛知県心身障害者コロニー（現在の愛知県医療療育総合センター）という、春日井の山の中にある施設で二年間仕事をしていました。その後、大病をして入院したこともあって、たった数年のブランクなのに、近頃は名古屋の都心を歩いていると町の変化をすごく感じます。老舗のデパートのように昔からあるところは知っているけれど、今の町の全部を知っているわけじゃない。浦島太郎みたいな感じです。

それは愛知県教育会館のある鶴舞あたりもそうで、鶴舞と言えば名古屋大学の医学部というイメージが強いかもしれませんが、他の大学の看板もあちらこちらに立っています。都心じゃないと若い世代が来ないというのもあるかもしれません。通信制も多くなりましたから、たまに行くだけなら大学施設も都心の狭い場所でいいということになる。勉強の仕方も変わってきているのでしょうね。

愛知県教育・スポーツ振興財団は、数ある業務の一環として、いくつかの施設を管理・運営しています。少子高齢化が進み、うちが管理している施設でも本来の利用対象である児童・生徒が減少しています。それなら高齢者が使う施設に変えていけばいいのですが、施設はどういう使い方を想定して造ったかということに引きずられてしまいます。途中で仕様を変えるのは大変難しいことです。

施設を計画する時と、建てて使う時とは時間的なズレがあります。耐用年数の問題もあります。今から造る施設は変えられるようにしておくことも必要でしょう。「使えるうちは…」と言っていては、修繕費もどんどん増えてしまう。「使用するのは何年間」と決めておく必要があると思います。難しいとは思いますけどね。

五十年後の社会なんか見えないですよね。その頃にはインターネット上でやれることが増えて、もう施設なんていらないのかもしれない。

施設の使い方で少し角度の違う話なのですが、今回は、うちの絵画コンクールの展示にショッピングセンターが場所を提供してくれました。今までは教育会館の中でしか展示していなかったので、わざわざ来てくださる人にしか見てもらえませんでした。ショッピングセンターとしては集客目的かもしれないけれど、我々としてはたくさんの人に見てもらえるので、それはそれでよかったと思います。そういうウィンウィンの関係がちゃんとできるのなら、どんどんやっていけばいいと思うんです。

愛銀教育文化財団でも、文化的な活動をされている方達にそういう場を無理なく提供できるといいのかもしれないですね。そういう知恵を出せばやれるような社会になってきているのかな、とも思います。

行政ではテリトリーが決まっていて、その役割が優先される気がしますが、公益団体の立場であれば「今までやったことはないけれど、これぐらいはやれるんじゃないの？」ということがやれます。役人気質みたいなもので壁を造るのではなく、とりあえず公益的だという言葉の範疇に入ってくるなら、いいじゃないかと。壁を意識しないで、もうちょっと大きな目で見ればいいのだろうなと思えてきました。そのほうが面白みがありますしね。まあ、実際に何かやろうと思うと、工夫が必要になってくるのでしょうけれど（笑）。

さて、人生九十年とすると、私の場合は昭和の三十年、平成の三十年、そして令和のこれからの三十年となります。変化のスピードについていけるかどうか（笑）。でも、まずは「健康第一」ですよ。皆さんも気をつけてください――と、大病の体験者として言わせてもらいます。―談―

豊かで、華やかな音色を奏でるグランド・ハープ。ちょっと高田知子さんに似ているかもしれない。大らかだが、繊細。ふんわりとしているが、芯はしっかり。

そんな高田さんがハープと出会ったのは高校の吹奏楽部だ。

「打楽器がやりたくて入ったのですが、そこでは何故か打楽器担当がハープを弾くことになっていたんです」

ハープの第一印象は〝天使が舞い降りるような素敵な楽器〟。顧問の先生の勧めもあり、大学からはハープ一筋。在学中から仕事が入り、今や十八年のキャリアになる。

「海外へ行くことも考えましたが、結婚のチャンスを逃しそうだったので止めました（笑）」

憧れの結婚を実現し、岡崎から豊明へ転居。現在、フリーのママさん演奏家として活動中だ。人との触れ合いが好き。だから生演奏を聴いてほしい。それが高田さんのスタイルだ。

「豊明には学生時代の友人もいて、一緒に何かやろうよ、ということになって。名前を勝手に豊明市音楽家協会と付けてしまいました（笑）」

特にこだわっているのが『〇歳児からのワンコインクラシックコンサート』だ。通常のクラシックコンサートとは真逆で、赤ちゃんOK。会場も明るめにする。

「豊明で母親が赤ちゃんを手にかけてしまうという、とても悲しい事件が起きてしまったんです。だからこそ、ママ達の気分転換やコミュニティの場として、コンサートを続けていきたいと思いました」

もちろん、大人向けのコンサートでは未就学児不可。そこはプロの演奏家としてきちんと分けているという。

大きな公演は年一回のペースだが、高齢者施設などでも演奏するし、自宅でハープ教室も開いていて、とにかく忙しい。それでも「自分で企画することが楽しい」という高田さん。次の仕掛けは？

「最近はバレエとコラボして『〇歳児～』でやりたいと妄想しています（笑）」

好きな曲はアッセルマンの『泉』。

「風景が出てくるような音楽がしたい。その風景をお客様と一緒に見たいですね」

と、今日も全長一八〇センチのグランド・ハープを自力で運んでいく。

ママさん達の癒しになりたい。47弦で紡ぐ、美しい心の風景。

グランド・ハープの演奏活動

高田知子さん

第30回助成（個人）

岡崎市出身。4歳からピアノを習い始める。光ヶ丘女子高等学校の吹奏楽部で打楽器奏者をめざすも、最終的にはハープの道へ。名古屋芸術大学音楽学部卒。愛知県立芸術大学大学院音楽研究科博士前期課程修了。卒業後は海外に短期留学も果たす。演奏およびハープ体験などを通して音楽の素晴らしさを伝える。豊明市音楽家協会創立5周年の今年は「0歳児からの～」を休み、3月28日に「10名のソリストによるコンチェルトの饗宴」を企画・出演。

仲間 Spirits

尾張万歳　今枝社中の主宰・今枝増笑門さんは根っからの芸能好きだ。大学時代には京都の『葵祭』を手伝い、就職後は転勤先の仙台で『正調雀踊り』の伝承に奔走し、青森では『ねぶた祭』の囃子方に身を置いた。

やがて本社勤務となり、故郷の名古屋市東区に帰って来た今枝さんは考えた。

「名古屋ならではの郷土芸能は何だろう。一生懸命になれる何かを一つ見つけよう」

それが尾張万歳だった。

奇しくも、尾張万歳は同じ東区にある長母寺が発祥と言われている。鎌倉時代に住職の無住国師が仏教を説くために作り、その後、長母寺の寺領であった知多地域に広まっていったというのだ。今枝さんも知多の尾張万歳保存会（国指定無形民俗文化財）で修業をした後に「名古屋でやりたい」と独立。長母寺のお膝元を拠点に今枝社中を立ち上げた。

以来、今年で十年目。社中は総勢十二名。今枝さんの子供三人も立派な後継ぎに育っている。弟子の中には小学四年生もいて、なかなか有望だという。

公演は年に四十回ほど。特に年始は忙しい。名古屋城や犬山城の開門式、徳川園での正月公演、有松での門付け…等々。

「基本的に依頼は断りません（笑）」

と、今枝さん。消滅の危機に瀕している伝統芸能を守り続けていく心意気か。

今枝社中では、門付万歳、三曲万歳、御殿万歳を披露する。

門付万歳は、扇を持つ太夫と鼓を打つ才蔵の二人が掛け合う。

三曲万歳は、鼓に三味線と胡弓を加え、歌舞伎の一場面など寸劇を織り交ぜて笑わせる。現代の音曲漫才の原型だ。

御殿万歳は、太夫を中心に才蔵が左右二人ずつ並び、「えへ」「おほ」の合いの手を入れながら、七福神を迎える様子を賑やかに演じる。今枝社中はこの御殿万歳を名古屋城の本丸御殿でも颯爽と披露している。

今枝さんは尾張万歳のような伝統芸能は〝送りバント〟でつないでいくと言う。

「これからは公演もできるだけ若い世代に託そうと思います。夢は子供や弟子達がそれぞれに一座を作れるほど尾張万歳が発展すること。『あちらが面白い』『いや、こちらだ』と競い合いながらね（笑）」

笑う門には福来たる。ご当家様のご繁盛は去年よりも今年～♬

漫才の原型「尾張万歳」の次世代への継承

尾張万歳 今枝社中

第29回助成（団体）

主宰の
今枝増笑門さん

2010年、名古屋市内で唯一尾張万歳を継承する団体として今枝社中を発足。保存だけでなく、次の世代への継承をテーマに活動。子供達の万歳体験などを通して、門下生は発足当時の3倍となる。徳川園（名古屋市東区）の正月公演は15年連続。また、名古屋城では季節の折々に万歳を披露。2017年、名古屋城本丸御殿「孔雀の間」で今枝増笑門の五代目蝶太夫襲名披露公演を実施。2018年、名古屋城本丸御殿完成公開記念イベントに出演。2019年、名古屋まつりに初参加。そのほか、多方面で積極的に公演を行っている。

仲間達の近況メモ

2019年 9月（追加分）

●**コレギウム・ムジクム（チェンバロ音楽）** 第11回助成・団体
第71回 コレギウム・ムジクム チェンバロコンサート
〔名古屋大学 シンポジオン（名古屋市千種区）〕

●**堀　優子さん（演劇）** 第23回助成・個人
劇座公演「かたりの椅子」〔損保ジャパン日本興亜人形劇場 ひまわりホール（名古屋市中区）〕

●**てほへ（地域文化の伝承と再生）** 第23回助成・団体
志たら「開打」小牧公演〔小牧東部市民センター（小牧市）〕

2019年 10月

●**南谷博一さん（マンドリンの資料収集等）** 第9回助成・個人
中野二郎先生の藝術に迫る（御生誕117年を記念して）謝恩演奏会〔電気文化会館 ザ・コンサートホール（名古屋市中区）〕

●**バッハアンサンブル名古屋** 第4回助成・団体
バッハアンサンブル名古屋第15回演奏会
〔長久手市文化の家「森のホール」（長久手市）〕

●**鵜飼敏伸さん（漆芸）** 第29回助成・個人
第66回日本伝統工芸展に出展〔名古屋栄三越（名古屋市中区）〕

●**LEEO アンクロンチーム（竹楽器楽団）** 第29回助成・団体
葵第一幼稚園 慰問演奏〔学校法人葵学園（名古屋市南区）〕

●**太田元弘さん（絵画制作）** 第14回助成・個人
太田元弘展「峡景　知欲の花」〔織部亭（一宮市）〕

●**東海メールクワイアー（男声合唱）** 第7回助成・団体
第62回定期演奏会「多田武彦作品集」
〔三井住友海上しらかわホール（名古屋市中区）〕

●**平松八江子さん（ピアノコンサート自主企画）** 第6回助成・個人
みんなとみなとコーラス第3回コンサート
〔港文化小劇場（名古屋市港区）〕

●**てほへ（地域文化の伝承と再生）** 第23回助成・団体
志たら「開打」岡崎公演〔岡崎市図書館交流プラザ Libra（岡崎市）〕
志たら「開打」豊橋公演〔ライフポートとよはし（豊橋市）〕

2019年 11月

●**劇団 PAO COMPANY（演劇）** 第15回助成・団体
「やさしい幽霊 SPiRiTo ～モモとばぁばの交信日記～」
〔PAO COMPANY アトリエ（名古屋市千種区）〕

●**語人　サヤ佳さん（語り活動）** 第26回助成・個人
語人 サヤ佳「語りの会」2019 ～音楽とお話の世界～
〔逢妻交流館・多目的ホール（豊田市）〕

●**クール・ジョワイエ（男声合唱）** 第25回助成・団体
クール・ジョワイエ演奏会2019―委嘱・初演を、作曲家と共に―〔ウィルあいち　ウィルホール（名古屋市東区）〕

●**LEEO アンクロンチーム（竹楽器楽団）** 第29回助成・団体
G20外務相会議関連イベントに出演〔名古屋市〕
インドネシアフェスティバル〔名古屋国際センター（名古屋市中村区）〕

●**平松八江子さん（ピアノコンサート自主企画）** 第6回助成・個人
観楓会「おしゃべりピアニストひらめの心の唄」～愛と夢をつなぐ歌～〔白鳥庭園（名古屋市熱田区）〕

●**合唱団「空」** 第10回助成・団体
第23回定期演奏会〔ウィルあいち ウィルホール（名古屋市東区）〕

●**旭如会（琵琶演奏）** 第22回助成・団体
第52回琵琶の会「平家物語」〔今池ガスホール（名古屋市千種区）〕

●**てほへ（地域文化の伝承と再生）** 第23回助成・団体
志たら「開打」名古屋公演〔瑞穂文化小劇場（名古屋市瑞穂区）〕

●**奥三河音楽連盟** 第8回助成・団体
第45回新城音楽祭〔新城文化会館 はなのき広場 大ホール〕

●**空1301（総合芸術）** 第30回助成・団体
東日本大震災チャリティー公演「虹の会」に語り・音楽演奏・日本舞踊で参加〔imy ホール（名古屋市東区）〕

●**名古屋ゴールデンエイジ・メールクワイヤー（男声合唱）** 第30回助成・団体
創立25周年記念演奏会
〔電気文化会館 ザ・コンサートホール（名古屋市中区）〕

2019年 12月

●**総合劇集団俳優館** 第26回助成・団体
公演「二人の主人を一度に持つと」〔千種文化小劇場（名古屋市千種区）〕

●**大橋敏彦さん（金工）** 第3回助成・個人
第49回あかね会工芸展に出展〔愛知県美術館ギャラリー（名古屋市東区）〕

●**堀　優子さん（演劇）** 第23回助成・個人
なごや芝居の広場第三弾「片づけたい女たち」
〔千種文化小劇場（名古屋市千種区）〕

書籍・会報誌等の発行

●**まつり同好会** 第25回助成・団体
9・11月…「まつり通信」603・604号発行

●**小牧市文芸協会** 第2回助成・団体
9～12月…郷土文芸誌「駒来」第572～575号発行

●**守山リス研究会** 第19回助成・団体
9～11月…「リス研通信」NO.4838～4897発行

●**はんだ郷土史研究会** 第19回助成・団体
9・11月…「はんだ郷土史だより」第86号・87号発行

●**美術文化史研究会** 第11回助成・団体
9・11月…機関誌「びぞん」第97号・81号発行

●**忠震会** 第8回助成・団体
9月…忠震会報「爽恢」第31号発行

●**長久手市郷土史研究会** 第13回助成・団体
9月…「胡牀石」第54号発行

●**江南郷土史研究会** 第3回助成・団体
10～12月…「江南郷土史研究会会報」488号～490号発行

●**野田史料館** 第1回助成・団体
10月…「野田史料館報」第155号発行

●**愛知歴史研究会** 第7回助成・団体
10月…「あいち歴研会誌」第162号発行

●**半田空襲と戦争を記録する会** 第11回助成・団体
10月…「半田・戦争を記録する会通信」No.78発行

●**ため池の自然研究会** 第26回助成・団体
12月…「ため池の自然」No.60発行

●**上山明子さん（彫刻）** 第27回助成・個人
美術教育研究会の会報「美術教育研究」No.24/2018に論文『乾漆彫刻の系譜と継承のための教育』を掲載

※ここには事務局に入った連絡分をまとめて掲載しました。連絡状況によって、掲載のタイミングがずれる場合があります。ご了承ください。今後も皆さんの活動状況をお知らせいただければ幸いです。

日々、愚直に句を詠んでいく。感性を超えた向こう側をめざして。

文学部
名古屋高等学校
第27回援助（高校生）

水野先生・森崎先生を顧問に、20名余りが活動。俳句では、外部コーチ2名の指導も受けている。俳句甲子園には8年前から参加し、2014年に全国大会初出場、2015年に全国優勝、2019年に準優勝および個人賞（優秀賞）2名。「いつか名古屋高校チームAとBで決勝戦を！」と意気込む。高校生文芸コンクールなど、そのほかの大会でも受賞多数。地域のイベントに参加して模擬俳句甲子園も行う。2020こうち総文にも愛知県代表で出場予定。また、古典研究、文芸部誌でも全国的なコンクールで金賞等の優秀な成績を収めている。

顧問の
水野大雅先生

名古屋高等学校文学部は、中学と合同の部活動なので、最大六年間かけて経験を積める。そうかと思えば、高校二年で「いいなと思って」と入部した者もいる。あるいは、バリバリの理系だったり、体育系と兼部する文武両道タイプだったり。男子校の学ラン姿で同じように見えるが、実に個性豊かな面々が集っているのだ。

主な活動内容は、古典研究・文芸部誌・俳句…と、なかなか渋い。その成果は校舎一階のロビーにも展示されている。

中でも、俳句は注目の的だ。松山市で開催される俳句甲子園の全国大会に、六年連続で参加し、四年前には優勝。今年度は二チーム出場の快挙で、チームBが準優勝を獲得した。

「部を一つにまとめるためにも、俳句には全員で取り組んでいます」と、顧問の水野大雅先生。誘われて、部活の一環である句会を覗いてみた。

用紙に七十余の作品が無記名で載っている。部員以外にも先生やOB、受験勉強中の三年生も句を出しているという俳句中毒（フリーク）ぶり！　そこから各人が良いと思った作品を次々に選んでいき、みんなで講評していく。

「言葉から受ける身体感覚がいい」
「句の仕上がりとしてはもう一歩」
「すっと気持ちに入ってきた」
「描きたかったことはわかるが、その先が感じられなかった」……等々。

俳句甲子園では、一作品ごとに熱いディベートが繰り広げられる。それを批判合戦ではなく、相手の句を十分に鑑賞し、高め合っていくものにする。そのための鑑賞力を句会で磨いていく。同時に、自分の表現力を鍛え上げていくのだ。

「私達は分かりやすい共感だけでなく、奥深さ、独自性を追求しています」（水野先生）

合宿もあるというから驚きだ。今年は三回実施。二日で百句作るという荒行も！

「多作多捨。今のオフシーズンにいっぱい句を詠んで、学んで、捨てる。俳句スポーツ説というのがありますが、まさにその通りです」（水野先生）

集大成ともいうべき俳句甲子園では惜しくも優勝を逃したが、個人二名が優秀賞に輝いた。その句を披露しておこう。

卵みなつくりものめく冷蔵庫
毛虫這ふ無難を選ぶことなかれ

※俳句甲子園＝全国高等学校俳句選手権大会。5名1組となり、作品点と鑑賞点で競う。

編・集・後・記

久しぶりに新美南吉の童話や少年小説を読みました。戦前に書かれたものなので、物語中の風景は現代人にとっておとぎ話のようにも感じますが、新美南吉記念館の地に立ってみると、間近に権現山が見え、今も狐達が隠れ棲んでいるのではないかと、楽しい想像が膨らみます。ただし、特集記事にもありますように、南吉の童話は必ずしもハッピーエンドでは終わっていません。子供の頃に読んでも、大人になって読み返しても、考えさせられる。時代が変わっても、私達は南吉のお話の中に自分達の課題を見つけてしまうのです。そんな不思議な作品です。皆さんも、ぜひ一度、読み返してください。

表・紙・作・品

「Conflagration」縦2,910×横15,274mm
（素材：ミクストメディア）
藤原　葵さん作（第30回助成）

Ayuchi

あゆち第85号●2020年1月
発行：公益財団法人愛銀教育文化財団
〒460-8678　名古屋市中区栄三丁目14番12号
愛知銀行本店内 ☎(052) 251-3211(代)